

# モンゴル語族の文法書

山越 康裕

## A Guide to Reference Grammars of Mongolic Languages

YAMAKOSHI, Yasuhiro

**Keywords:** Mongolic languages, reference grammar

**キーワード:** モンゴル語族, モンゴル諸語, 参照文法

1. はじめに
2. モンゴル語族の概要
3. 類型論的観点から見た文法概略
4. 参照文法書リスト
5. モンゴル語族を対象とした参照文法書の特徴
6. おわりに

### 1. はじめに

本稿ではモンゴル諸語を対象に、これまで（2020年3月時点まで）に刊行された文法書について概観する。いわゆる記述文法書に限らず、規範的な文法書についても可能な範囲で言及し、モンゴル語族の文法書における特徴と問題点を挙げる。

### 2. モンゴル語族の概要

モンゴル諸語はモンゴル高原を中心に、中国・東北地方（大興安嶺）を東端（ダグール語、モンゴル語ホルチン方言など）、カスピ海西岸を西端（カルムイク語）、バイカル湖沿岸を北端（ブリヤート語）、中国・青海省（モンゴル語オイラト方言、ボウナン語など）・アフガニスタン・ヘラート周辺（モゴール語）をおおよそ南端として広い範囲にわたって分布している（地図参照）。ただしカスピ海沿岸のカルムイク語、アフガニスタンのモゴール語は他のモンゴル諸語の分布地域からかなり距離を隔てて点在している。

---

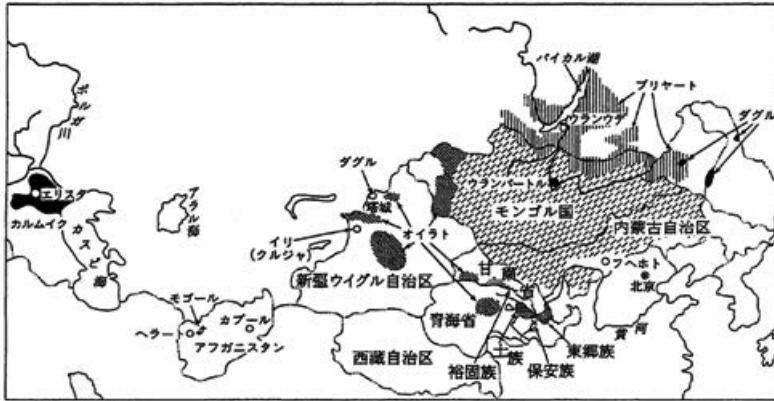
山越康裕. 2022. 「モンゴル語族の文法書」. 渡辺己・澤田英夫(編) 『参照文法書研究』. (アジア・アフリカ言語文化研究別冊 02.) pp. 39-72. DOI: <https://doi.org/10.15026/116958>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

<sup>1</sup> 斎藤 (2012: 64). ただし斎藤 (2012) の地図も本来は栗林 (2000), さらにさかのぼると栗林 (1992) から転用し, 国名表記を改めたものである。本稿の地図は斎藤 (2014: 64) 記載のものから中国・モンゴル国・アフガニスタン以外の境界線は除



地図. モンゴル語族の言語分布 (斎藤 2012 による)<sup>1</sup>

広く分布している大きな要因のひとつが、チンギス・カン（とその後数代にわたる）モンゴル帝国～元朝その他の領土拡張である。その結果、モンゴル系の民族じたいは中国雲南省など南にも分布している<sup>2</sup>。

現在母語話者が確認される（と推定される）モンゴル語族の言語は（方言・言語をどう区別するかが問題となるが）10前後ある。いずれもモンゴル語族であることは確実視されているが、系統樹モデルが提示され、おおむね意見の一致をみているツングース語族とは異なり、言語間の近縁関係については先行研究でもかなりの違いがある。これは、モンゴル帝国期の急速な使用地域の拡大とその後の分断、およびモンゴル高原以外の地域における他言語との接触による変化が原因と思われる。

モンゴル語族の言語・主要方言を表1にリストアップする。方言区分については研究者や話者コミュニティによって見解が異なるうえ、さらに細分化されるため、このリストが一般的なものとはいえないことをあらかじめことわっておきたい。

語族内部の分岐については諸説あり、定説はいまのところない。ブリアート語、ハムニガン・モンゴル語、モンゴル語、オイラト語（カルムイク語を含む）は広義の「モンゴル語」とみなされることもあり、これら言語間の関係は近いとみられる。また、東部裕固語、東郷語、康家語、保安語、土族語民和方言、土族語互助方言はシロンゴル・モンゴル諸語(Shirongol Mongolic) もしく

1 いううえで、「康家」を追加した。ダグル（ダグル）、カルムイク（カルムイク）等、本稿の表記と一部異なること、この地図は民族分布であり、言語分布とは若干異なることに注意する必要がある。

2 たとえば中国南部の雲南省通海県興蒙蒙古族郷には13世紀に当地に移動したモンゴル人の子孫とされる人々がコミュニティを形成している。彼らは中国の民族識別工作においては「蒙古族」とされ、モンゴル人としてのアイデンティティを有しているという（雲南省通海県蒙古族文化研究传承保护中心・内蒙古錫林郭勒职业学院蒙古文化研究所 2017）。また、白語と彝語の混交言語である卡卓語（略卓語とも表記）を母語とする（していた）とされる（木 2003, 雲南省通海県蒙古族文化研究传承保护中心・内蒙古錫林郭勒职业学院蒙古文化研究所 2017）。この言語がモンゴル語を基層言語とするという説もかつてあったが、戴・劉・傅（1987）、和（1989）、木（2003）といった先行研究ではモンゴル語を基層言語とする説に対しては否定的である。

表1 モンゴル語族に含まれる（とみなされる）主要言語・方言リスト

言語	方言・主要下位方言	主な地域	備考	
† 契丹語 Khitan			死語。モンゴル語族に含まれるかどうか、未解決	
ダグール語 Dagur/Daur	ブトハ方言 Butha Dagur	中国・内蒙古自治区北部、黒竜江省		
	チチハル方言 Qiqihar Dagur	中国・黒竜江省		
	ハイラル方言 Hailar Dagur	中国・内蒙古自治区北部		
ブリヤート語 Buryat	ボラガド方言 Bulagat Buryat	ロシア・バイカル湖西岸		
	エヒリド方言 Ekhirit Buryat	ロシア・バイカル湖周辺		
	ホリ方言 Khori Buryat	ロシア・バイカル湖東岸、ブリヤート共和国		
		アガ方言 Aga Buryat	ロシア・アガ・ブリヤート自治管区	
		シネヘン方言 Shinekhen Buryat	中国・内蒙古自治区北部	
	バルガ方言 Bargu Buryat	陳バルガ方言 Old Bargut Buryat	中国・内蒙古自治区北部	モンゴル語に分類されることもある。
	新バルガ方言 New Bargut Buryat	中国・内蒙古自治区北部		
ハムニガン・モンゴル語 Khamnigan Mongolian		ロシア・チタ州；中国・内蒙古自治区；モンゴル国東部		
モンゴル語 Mongolian	ホルチン方言 Khorchin Mongolian	中国・内蒙古自治区東部、黒竜江省、吉林省など	モンゴル語諸方言の中では最多の話者数。	
	ハラチン方言 Kharchin Mongolian	中国・内蒙古自治区東南部		
	バーリン方言 Baarin Mongolian	中国・内蒙古自治区東南部		
	チャハル方言 Chakhar Mongolian	内蒙古自治区中南部	内蒙古自治区の威信方言	
	ハルハ方言 Khalkha Mongolian	モンゴル国	モンゴル国の80%が話者	
	オルドス方言 Ordos	中国・内蒙古自治区西部	個別言語（オルドス語）と扱われることもある。	
オイラト語 Oirat		中国・新疆ウイグル自治区、甘粛省、青海省；モンゴル国		
	カルムイク語 Kalmyk	ロシア・カルムイク共和国	オイラト語の一方言とみなせるが、別言語として扱われることも多い。	
東部裕固語 Shira Yögür		中国・甘粛省		
東郷語 Santa/Dongxiang		中国・甘粛省、新疆ウイグル自治区、青海省		
康家語 Kangjia		中国・青海省		
保安語 Bonan		中国・甘粛省、青海省		
土族語 Monguor	民和方言 Minhe Monguor/Mangghuer	中国・青海省	民族識別工作上「土族」という民族にまとめられ、1言語とされてきたが、現在では別言語とする立場も有力である。	
	互助方言 Huzhu Monguor/Mongghul	中国・青海省		
モゴール語 Moghol		アフガニスタン・ヘラート周辺		

は河湟語と称され、こちらも音韻・文法特徴の多くを共有することが指摘されている。ただし古い時代にこの2グループ(広義「モンゴル語」およびシロンゴル・モンゴル諸語)に分岐したという確証はない。たとえば東部裕固語はシロンゴル・モンゴル諸語のなかでは広義の「モンゴル語」に近いともいわれる。ダグール語は満洲語由来の語彙も多く、20世紀初頭まではツングース語族とみなされることもあったが、Poppe(1930)によりモンゴル語族の言語であることが立証された。死語である契丹語についてもダグール語同様、ツングース語族とする説もあったが、こちらについても現在ではモンゴル諸語のひとつとする説が有力である(§4.2.15にて後述)。

### 3. 類型論的観点から見た文法概略

続いて、モンゴル諸語に共通する文法特徴について概述する。モンゴル諸語にみられる、類型的観点から見た文法特徴はおおむね共通している。接尾辞接続を基本とする膠着型言語で、接頭辞はない。SOV, Dependent-Headを基本語順とする pro-drop 型言語で、従属節は主節に先行する。つまり語レベルでも節レベルでも従属部が主要部に先行する。従属部標示型で、述語動詞と名詞項との関係は名詞項に各種の格接尾辞が接続することであらわされる。述語に主語人称が標示される言語(ブリヤート語、ハムニガン・モンゴル語、オイラト語、カルムイク語など)もあるが、これら言語の人称標識は人称代名詞が通時の変化によって付属語化したものである。

語形成は接尾辞を接続する接辞法がもっぱらで、複合・重複等他の手段による語形成は生産的ではない。その一方で形態的緊密性が高い「句」を構成する「句形成」ともいえるような手法が発達している。後述するが、「語」の定義を明示していない多くの先行記述ではこの「句」を「複合語」としている。先行記述のなかには、語を繰り返すことで複数性等を示す用法についても「重複」とみなしているものもある。これらを複合・重複といった語形成法とみなすことができるかどうかはどのように「語」を定義するかで見解が異なるが、音韻論的観点から「語」を定義する場合には、やはり語形成法とは認めがたい(cf. Yamakoshi 2011)。

品詞はおもに三つに大別され、格接尾辞をとりうる語類を名詞類、「活用」接尾辞をとりうる語類を動詞、どちらもとらない語類を不変化詞類とするのが妥当だと筆者(=山越; 以下同様)は考える(cf. 山越 2008)。形容詞は名詞類の下位範疇に属し、格接尾辞をとることができる。

動詞は文末(=主節述語)専用の形式(定動詞直説法、定動詞希求法)とそれ以外の形式(分詞(伝統的には「形動詞」とよばれる)、副動詞)にわけられる。分詞は連体節述語、名詞節述語として機能する。副動詞は副詞節述語として機能する。分詞と副動詞の一部は動詞連続の先行要素にもなりうる。

自然発話においては二つ以上の節が連続し、長い一文を構成することが頻繁に観察される。その一方、分詞や副動詞が文末に位置することもある。これを insubordination, いわゆる「言いさし」と認めるか否かは慎重に判断する必要があるが(cf. Robbeets 2016, Dwyer 2016), 少なくとも原則として文終止の機能をもたない副動詞に関しては insubordination とみなしてよいと考える。なお、副動詞がさらに文法化が進んで一定の機能(希求法など)を有するようになったと考えられる形式も観察される(Yamakoshi 2017)。分詞の文末用法はモンゴル語族の多くの言語に存在するが、その頻度については差異があり、ダグール語、ブリヤート語、ハムニガン・モンゴル語では高頻度であらわれ、東郷語、康家語、土族語互助方言ではほぼ確認されない(山越 2018)。

音韻面ではいわゆる「母音調和」とよばれる語内部の母音の共起制限がモンゴル諸語を含むアルタイ諸言語の特徴と言われるが、「母音調和」を欠く言語(東郷語、康家語、保安語、土族語互

助方言、土族語民和方言、モゴール語)も多い。モンゴル文語の表記から古くはCVCを基本とする音節構造を有していたと考えられるが、これを比較的保持している言語(ブリヤート語など)、CVCCのように音節末の子音連続が確認される言語(モンゴル語、カルムイク語など)、CCVCのように音節頭の子音連続が確認される言語(土族語民和方言、東部裕固語など)と、さまざまな改変がみられる。

アクセントはモンゴル語族のすべての言語で非弁別的である。ただしアクセントのタイプ(高低か強弱か、またはその双方の組み合わせか)やアクセント位置は言語によって異なっており、上述の音節構造の改変にも影響を及ぼしていると考えられる。

#### 4. 参照文法書リスト

以下、基本的には「単著」で、音韻・文法を含むものを言語・刊行年順にリストアップする。参照文法書と呼ぶには若干分量や内容が不足しているものでも、入手しやすいものについては書誌情報を記載する。先述した通り、筆者も網羅的に把握しているわけではないため、リストに掲載していない文献も当然ながら存在することをあらかじめことわっておく。

##### 4.1. 語族全体を網羅した概説書

以下2点が先行研究の情報をある程度網羅的にまとめている。

Janhunen, Juha, ed. 2003. *The Mongolic Languages*. London and New York: Routledge. [Eng]<sup>3</sup>

斎藤純男. 2012. 『モンゴル語史研究入門』[草稿 2012年版] 東京学芸大学. [Jpn]

Janhunen, ed. (2003) は語族全体を概括したもので、比較的新しく、利用価値が高い。収録言語は Proto-Mongolic (モンゴル祖語; Janhunen 2003a), Written Mongol (モンゴル文語; Janhunen 2003b), Middle Mongol (中期モンゴル語; Rybatzki 2003a), Khamnigan Mongol (ハムニガン・モンゴル語; Janhunen 2003c), Buryat (ブリヤート語; Skribnik 2003), Dagur (ダグール語; Tsumagari 2003), Khalkha (モンゴル語ハルハ方言; Svantesson 2003), Mongol dialects ((おもに中国領内の)モンゴル語諸方言; Janhunen 2003d), Ordos (オールドス語; Georg 2003a), Oirat (オイラト語; Birtalan 2003), Kalmuck (カルムイク語; Bläsing 2003), Moghol (モゴール語; Weiers 2003), Shira Yughur (東部裕固語; Nugteren 2003), Mongghul (土族語互助方言; Georg 2003b), Mangghuer (土族語民和方言; Slater 2003a), Bonan (保安語; Hugiltu 2003), Santa (東郷語; Kim 2003)。このほかに類型的特徴から語族間の言語を対照した章(Rybatzki 2003b)、契丹語の研究概況をまとめた章(Janhunen 2003e)、チュルク語族との関係について記した章(Schönig 2003)を含む。各章には先行研究の概要も記載されているため、2003年以前に刊行された文献を網羅した文献ガイドとしても活用しうる。以降、本書収録の文法概説についての書誌情報に言及する際には冒頭に【諸語】と付す。

斎藤(2012)は私家版であり、広く公開されている文献ではないが、こちらも文献ガイドとしての利用価値が高い。モンゴル語史、文字史、モンゴル語族諸言語の紹介、研究史などを文献情報とともに概括している。この類の情報が日本語で公刊されることは少ないことを考えると、私家

<sup>3</sup> 以下、書誌情報末尾に記述言語を[]で括った略号で示す。略号は稿末に一覧で示す。

版ではなく何らかの形で公刊が望まれる。

このほか以下も語族全体を概括的にとらえるのに適している。

栗林均氏による『言語学大辞典』（亀井・河野・千野編 1989-2002）の以下の項目：「オイラト語」「オールドス語」「カルムイク語」（以上第1巻）、「シラ・ユグル語」「シロンゴル・モンゴル語」「ダグール語」「東郷語」「内蒙古語」（以上第2巻）、「保安語」「ブリヤート語」（以上第3巻）、「モゴール語」「モンゴール語」「モンゴル語」「モンゴル諸語」（以上第4巻）

Akademija Nauk SSSR. 1968. *Jazyki narodov SSSR: Mongol'skie, Tunguso-man'zhurskie i paleoaziatskie jazyki*. Leningrad: Akademija Nauk SSSR. [Rus]<sup>4</sup>

Russiiskaja Akademija Nauk. 1997. *Jazyki mira: Mongol'skie jazyki, Tunguso-manchzhurskie jazyki, Japonskii jazyk, Koreiskii jazyk*. Moskva, Rossiiskaja Akademija Nauk and Izdatel'stvo Indrik. [Rus]

Mongyul sudulul-un nebterkei toli nayirayulqu jöblel, ed. 2004. *Mongyul sudulul-un nebterkei toli: üge kele, üsüg biçig*. Kökeqota: Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya. [別題：蒙古学百科全书编辑委员会『蒙古学百科全书：语言文字』呼和浩特：内蒙古人民出版社] [T.Mon]

## 4.2. 個別言語を対象としたおもな文法書

### 4.2.1. シリーズとしての文法書

モンゴル語族の諸言語の記述文法としてシリーズ化されているものに以下の2点がある。

#### 1) 「蒙古语族语言方言研究丛书」（呼和浩特：内蒙古民族出版社）

中国・内蒙古大学のモンゴル語研究室チームが1980年代に実施した合同調査の成果として、中国国内に分布するモンゴル諸語（ブリヤート語バルガ方言（陳バルガ方言）、ダグール語、東郷語、保安語、土族語互助方言、東部裕固語、オイラト語）の文法・語彙・テキストの3点セット（合計20冊）を刊行している。ただし、オイラト語の文法書は未完である。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所2015-16年度共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」（代表：児倉徳和）および2018-2020年度共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容—外的要因と内的要因—」（代表：山越康裕）にてオンラインデータベース化作業をおこなっている。このシリーズに共通する大きな欠点は、1) 例文グロスを欠くこと、2) 品詞分類の基準が一部恣意的であること、の2点である。ただしこの2点の欠点はその他多くの先行研究にも共通するもので、単に「叢書」に限定した問題というわけではない。なお、ブリヤート語バルガ方言の文法書のみモンゴル語で記述されており、他の文法書は漢語（中国語）で記述されている。これは、このシリーズではブリヤート語バルガ方言（と、文法書が未刊のオイラト語）のみがモンゴル語の方言とみなされ、他がモンゴル語とは別言語とみなされていることによる。

<sup>4</sup> ロシア語、モンゴル語（キリル文字、モンゴル文字とも）による出版物の書誌情報はラテン字に転写して表記する。

以下、各言語において「【叢書】」を冒頭に付したものがこのシリーズとして刊行された文法書である。文中でこのシリーズ全体について言及する際には「叢書」と示す。

## 2) 「中国少数民族语言简志丛书」(北京：民族出版社)

中国(台湾含む)における57の少数民族言語の音韻・文法概略を『○○語簡志』(○○語簡誌)というタイトルでそれぞれ1冊ずつ書き著した文法概説書である。地域・語族ごとに再編・改訂増補された全6巻の「修訂本」が2009年に出版されている。以下、「【簡誌】」と冒頭に付したものがこのシリーズとして刊行された文法書である。

### 4.2.2. ダグール語 *Dagur; Daur* 达斡尔语

モンゴル語族のなかでは(現在の分布でいえば)東端に分布する言語である。18世紀に新疆地域の守備を命じられ、一部が新疆に移住した。その末裔が塔城方言を使用する。話者数は全体で9万人前後<sup>5</sup>と推定される。

Poppe, Nicholas. 1930. *Dagurskoe narechie*. Leningrad: Izdatel'stvo Akademij Nauk SSSR. [Rus]  
⇒ テキスト・語彙・文法の3点セットが1冊にまとめられている。

Martin, Samuel E. 1961. *Dagur Mongolian Grammar*. Bloomington: Indiana University Press. [Eng]  
⇒ 構造主義に則った文法・語彙・テキストの3点セット。インディアナ大学はアメリカにおけるアルタイ諸言語研究の拠点でもあり、さまざまな文法書が出版されている。

Todaeva, B. X. 1986. *Dagurskii jazyk*. Moskva: Rossiiskaja Akademija Nauk and Izdatel'stovo. [Rus]  
⇒ ブトハ方言を対象とした文法書。テキスト・語彙を含む。

【簡誌】 仲素純. 1982. 『达斡尔语简志』北京：民族出版社。[Chi]

Namtsarai and Qaserdeni. 1983. *Dagur kele mongyul kelen-ü qaričayulul*. Kökeqota: Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya. [別題：那木四来・哈斯额尔敦『达斡尔语与蒙古语比较』呼和浩特：内蒙古人民出版社] [T.Mon]  
⇒ モンゴル語との比較を念頭に記述された文法書。統語に比較的分量を割いている点、各例文にモンゴル語の逐語訳がついている点が特徴である。

【叢書】 恩和巴图. 1988. 『达斡尔语和蒙古语』(蒙古语族语言方言研究丛书004) 呼和浩特：内蒙古民族出版社。[Chi]  
⇒ 「叢書」のなかでは分量が多く、比較的詳細な記述といえる。

Chuluu, Üjjiyediin. 1994. *Introduction, Grammar, and Sample Sentences for Dagur*. (Sino-Platonic Papers, 56.) Toronto: University of Toronto. [Eng]  
⇒ 恩和巴图(1988)に依拠したスケッチだが、例文にきちんとグロスが付されている。

<sup>5</sup> 以下、話者数は引用元が示されていない場合は斎藤(2012)による。ただし斎藤(2012)の見積もりは推定される「最大値」をあらわしている印象がある。使用人口は実際にはより少ない印象を受ける。

【諸語】 Tsumagari, Toshiro. 2003. Dagur. In: Janhunen, ed. (2003), 129–153. [Eng]

烏珠尔・欧南. 2003. 『达斡尔语概论』 哈尔滨: 哈尔滨出版社.

⇒ チチハル方言の記述。

Yu, Wonsoo, Jae-il Kwon, Moon-Jeong Choi, Yong-kwon Shin, Bayarmend Borjigin and Luvsandorj Bold. 2008. *A Study of the Tacheng Dialect of the Dagur Language*. (Altaic languages series 2.) Seoul: Seoul National University Press. [Eng]

⇒ 新疆ウイグル自治区の塔城方言に関する記述。分量じたいは多くないが、語彙・グロス付きテキストを含む。韓国アルタイ学会 REAL プロジェクト (Researches on Endangered Altaic Languages) で多くのアルタイ系危機言語のフィールドワークを実施。本書と §4.2.4 にあげた Yu (2011) はその成果だが、モンゴル語族に関しては現時点では他の文法書は出ていない (調査自体はブリヤート語、オイラト語、東部裕固語、保安語、土族語民和方言などの言語・方言を対象におこなっている)。

#### 4.2.3. ブリヤート語 Buryat; Buriat

ブリヤート語はロシア・バイカル湖周辺で主に使用される。地理的分布でいえばモンゴル語族のなかでもっとも北に分布する言語である。話者は約 30 万人と推測される。モンゴル語との類似点が多いことから広義の「モンゴル語」に含め、モンゴル語ブリヤート方言とすることもあつた。しかしモンゴル語他方言 (たとえばハルハ方言) 話者との意思疎通は困難である。さらにブリヤート語はバイカル湖を挟み、東部方言 (威信方言であるホリ方言) と西部方言 (ボラガド方言・エヒリド方言) の間の差が大きく、文化的背景も異なる。西部方言は話者数が減っており、いわゆる危機言語とされる (Moseley, ed. 2010)。

Sanzheev, G. D. 1941. *Grammatika burjat-mongol'skogo jazyka*. Moskva and Leningrad: Izdatel'stvo Akademij Nauk SSSR. [Rus]

⇒ 後の Sanzheev et al., eds. (1962) に引き継がれる。

Poppe, Nicholas N. 1960. *Buriat Grammar*. (Uralic and Altaic Series 2.) Bloomington: Indiana University Publications. [Eng]

⇒ インディアナ大学から刊行される文法書はいずれも音韻やパラダイムの記述が構造主義的である。

Sanzheev, G. D. et al., eds. 1962. *Grammatika Burjatskogo jazyka: fonetika i morfologija*. Moskva: Izdatel'stvo vostochnoi literatury. [Rus]

Bertagaev, T. A. and C. B. Cydendambaev. 1962. *Grammatika Burjatskogo jazyka: sintaksis*. Moskva: Izdatel'stvo vostochnoi literatury. [Rus]

⇒ この 2 点で音韻・形態・統語を総合的に記述。合計 650 ページあまりの詳細な文法書。ただしグロスはない。



【諸語】 Skribnik, Elena. 2003. Buryat. In: Janhunen, ed. (2003), 102–128.

### ブリヤート語シネヘン方言

山越康裕. 2006. 「シネヘン・ブリヤート語」 中山俊秀・江畑冬生編『文法を描く：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 271–298. [Jpn]

⇒ 言語類型論的観点に基づいて章立てされたラフスケッチ。

Yamakoshi, Yasuhiro. 2011. Shinekhen Buryat. In: Yasuhiro Yamakoshi, ed. *Grammatical Sketches from the Field*. Fuchu: ILCAA, TUFSS. 137–177. [Eng]

⇒ 上記山越 (2006) の英語版。

### ブリヤート語バルガ方言 (バルガ・ブリヤート語)

【叢書】 Buusiyang and B. Jirannige. 1995. *Baryu aman ayalu*. Kökeqota: Öbür Mongyul-un yeke suryaγuli-yin keblel-ün qoriya. (保祥・吉仁尼格『巴尔虎土语』呼和浩特：内蒙古人民出版社 (蒙古语族语言方言研究丛书 001)) [T.Mon]

⇒ バルガ・ブリヤート語陳バルガ方言を扱う。詳細な記述ではあるが、モンゴル語によって書かれている。バルガ方言に関しては Poppe や服部四郎なども文法記述を行っているが、量的にはこの叢書の 1 冊がもっとも充実している。

#### 4.2.4. ハムニガン・モンゴル語 *Khamnigan Mongolian*

ブリヤートとほぼ同地域に分布する。話者数はおよそ 2000 人前後と推定される (Janhunen 2003c)。ツングース系のハムニガン・エヴェンキ (自称: *kamnigan* / モンゴルおよびブリヤートからの他称 *xaminigan* または *tunguus*) だという民族アイデンティティを有し、ハムニガン・エヴェンキ語も母語とする。ハムニガン・エヴェンキ語、ハムニガン・モンゴル語ともに危機言語である。旧来ブリヤート語の一方言と見なされていたが、モンゴル語とブリヤート語の中間的な音韻特徴を有することから別個の言語としてあつかうべきだと Janhunen (1990) が主張、Janhunen (2003c) にもそれが反映されている。

Janhunen, Juha. 1990. *Material on Manchurian Khamnigan Mongol*. (Castrenianumin toimitteita 37.) Helsinki: The Finno-Ugrian Society. [Eng]

⇒ 中国領内に亡命したハムニガンが使用するハムニガン・モンゴル語の音韻論・形態論の概説および語彙をまとめたもの。Janhunen 氏はフィン・ウゴル方式の音韻表記法を採用しており、慣れないと若干読みづらい。

【諸語】 Janhunen, Juha. 2003. *Khamnigan Mongol*. In: Janhunen, ed. (2003), 83–101.

Janhunen, Juha. 2005. *Khamnigan Mongol*. München: Lincom. [Eng]

⇒ Lincom 社より刊行されている一連のスケッチグラマーシリーズの一つ。用例は少ない。

山越康裕. 2007. 「ハムニガン・モンゴル語」 中山俊秀・山越康裕編 『文法を描く 2: フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 229–258. [Jpn]

⇒ ラフスケッチ。Janhunen (1990) と同じく、中国領内のハムニガン・モンゴル語の文法概略。

Yu, Wonsoo. 2011. *A Study of the Mongol Khamnigan Spoken in Northeastern Mongolia*. (Altaic Languages Series 4.) Seoul: Seoul National University Press. [Eng]

⇒ モンゴル国東部に亡命したハムニガンのハムニガン・モンゴル語の参照文法。比較的まとまっている。中国領内のハムニガン・モンゴル語に比べるとモンゴル語ハルハ方言にかなり近づいており、Janhunen (1990), 山越 (2007a) の記述と対照すると差異が大きいことが読み取れる。

#### 4.2.5. モンゴル語 Mongolian

現在のモンゴル語族の中で最大の話者数を有する。話者は全体で 500 万人前後と推測される。文語、ハルハ方言、内蒙古自治区の標準モンゴル語を対象とした文法書が代表的だが、その他の方言に関してもいくつか文法書が出ている。モンゴル国内ではハルハ方言の使用人口が増え、その反面他の方言が急速に衰退しつつある。内蒙古自治区はじめ中国領内では中国語を母語とするモンゴル系民族も多く、モンゴル語諸方言話者は減少しつつある。以下、文語、各方言の参照文法と呼べそうなものを列挙する。各地域の威信方言を対象とする文法書は音声・音韻に関する記述が乏しく、その一方で周辺方言を対象とする記述は形態論・統語論の記述が貧弱である。これは日本語の方言記述にも共通する問題だといえる。

#### モンゴル文語 Written Mongolian

伝統的モンゴル文字によって表記される「文語」の文法書のいくつかを挙げる。

Poppe, N. N. 1937. *Grammatila pis'menno-mongol'skogo jazyka*. Moskva i Leningrad: Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR. [Rus]

Hambis, Louis. 1945. *Grammaire de la Langue Mongole Écrite* (premiere partie). Paris: Adrien-Maisonneuve. [Fre]

Poppe, Nicholas. 1954. *Grammar of Written Mongolian*. Wiesbaden: Otto Harrasowitz. [Eng]

⇒ 上記 Poppe (1937) からの英訳。Poppe の記述はいずれも概括的で、若干物足りない。

Chingaltai. 1963. *A Grammar of the Mongol Language*. New York: Frederick Ungar Publishing co. [Eng]

Rinchen, Bjambyn. 1964–67. *Mongol bichgijn xelnij züj*. Ulaanbaatar: Shinzhlex Uxaany Akademijn Xevlex Üjldver. [C.Mon]

⇒4 巻本で充実しているが、文字史・筆写法・形態論で終わっており、統語に関する記述を欠いている。

【諸語】 Janhunen, Juha. 2003b. *Written Mongol*. In: Janhunen, ed. (2003), 30–56. [Eng]

Sárközi, Alice. 2004. *Classical Mongolian*. München: Lincom. [Eng]

⇒Lincom 社のスケッチグラマーシリーズの一つであり、シリーズの他の書籍同様、エッセンスのみを抜き出している。

### ハルハ方言 *Khalkha*

話者数およそ 250 万人。モンゴル国の標準的方言である。キリル文字による正書法が 1940 年代に整備され、以後マイナーチェンジを経ている。音韻表記を欠いた文法書がほとんどであるが、これは正書法のある言語の「文法書」の多くに共通する問題だと思われる。

Poppe, Nikolas. 1931. *Prakticheskij uchebnik Mongol'skogo razgovornogo jazyka (Xalxaskoe narechie)*. Leningrad: Izdanie Leningradskogo Vostochnogo Instituta. [Rus]

⇒ハルハ方言に関する最初の包括的な文法書とされる。筆者未見。

野村正良. 1950. 「蒙古語」市河三喜・服部四郎編『世界言語概説』下巻. 研究社. 537–590.

⇒スケッチ。イソップ物語「北風と太陽」のテキストを含む。日本語による逐語訳あり。

Poppe, Nikolaus. 1951. *Khalkha-mongolische Grammatik*. Wiesbaden: F. Steiner. [Ger]

⇒上記 Poppe (1931) の「改訂増補版」。テキスト、語彙も含む。ただしグロスはない。服部 (1953) による書評あり。

Todaeva, B. X. 1951. *Grammatika sovremennogo Mongol'skogo jazyka: fonetika i morfologija*. Moskva: Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR. [Rus]

⇒音韻論と形態論のみだが、内容は比較的詳細である。

Luvsanvandan, Sh., ed. 1966. *Orchin cagijn Mongol xel züj*. Ulaanbaatar: Ulsyn Xevlelijn Xereg Erxlex Xoroo. [C.Mon]

⇒モンゴル国におけるモンゴル人による参照文法書。半世紀経つがいまだに広く利用される。

Poppe, Nicholas. 1970. *Mongolian Language Handbook*. Washington: Center for Applied Linguistics. [Eng]

⇒生涯通じていくつかの文法書を著した Poppe が生前最後に刊行した文法書。米国亡命後の、構造主義的な考え方に基づく記述。精密ではあるが、Handbook とあるようにやはり分量は少なめである。

Sanzheev, G. D. 1973. *The Modern Mongolian Language*. Moscow: NAUKA publishing house, Central Department of Oriental Literature. [Eng]

⇒ ソ連で 1960 年代を中心に刊行されていた文法概略集「アジア・アフリカの言語」シリーズのモンゴル語文法を英訳し、刊行したもの。原典は Sanzheev, G. D. 1960. *Sovremennyj mongol'skij jazyk*. 比較的まとまりのよい文法書で、末尾に簡略ながらテキストがついている。

Kullmann, Rita and D. Tserenpil. 1996. *Mongolian Grammar*. Hong Kong: Jensco, Ltd. [Eng]

⇒ ドイツ語で書いた原稿（未公開）を英訳し出版した総合的記述である。ただし「キリル文字正書法によるモンゴル語」を対象としており、音声・音韻に関する記述を欠く。文法用語が独特（術語がドイツ語的）で癖があるが、400p を超える分量と豊富な用例、インデックスつき、といった点では「参照しやすい」文法書といえる。基本文献として参照されることが多い。著作権が何度か譲渡され再版を重ね、2015 年にスイス、Kullnom Verlag より刊行された第 5 版が最新の版である（2020 年 3 月現在）。

【諸語】 Svantesson, Jan-Olof. 2003. Khalkha. In: Janhunen, ed. (2003), 154–176. [Eng]

Bittigau, Karl Rudolf. 2003. *Mongolische Grammatik: Entwurf einer Funktionalen Grammatik (FG) des modernen, literarischen Chalchamongolischen*. (Tunguso-sibirica 11.) Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

⇒ コーパスをもとに機能文法の枠組みで書かれた文法書。

Önörbajan, C., A. Cog-ochir and Ü. Ariunbold, eds. 2008. *Orchin cagijn mongol xel*. Ulaanbaatar: Mongol Ulsyn Bolovsrolyn Ix Surguul'. (第 2 版) [C.Mon]

⇒ モンゴル国立教育大学で編纂されたモンゴル語文法書。歴史・音声・音韻・形態・統語・語彙・文体と総合的に記述されており、比較的バランスはよい。例文にグロス等はないが、そもそもモンゴル語で書かれているため当然ともいえる。

Janhunen, Juha A. 2012. *Mongolian*. (London Oriental and African Language Library 19.) Amsterdam: John Benjamins. [Eng]

⇒ 堅実な記述で充実した参照文法書。モンゴル語を対象としたものとしては現時点でもっとも信頼がおけるうえ、体系的でわかりやすい記述的な文法書といえる。bound morpheme に関する affix と clitic の区別に言及している点、品詞分類に関して形式的基準を示している点などが特徴的である。

### 内モンゴル標準モンゴル語 Barimjaa

おもにチャハル方言に依拠した中国領内の標準モンゴル語（モンゴル語でバリムジャー barimjaa とよばれる）についての文法書を挙げる。

Čenggeltei. 1979. *Odu üye-yin mongyul kelen-ü jüi*. Kökeqota: Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya. [別題：清格尔泰『现代蒙古语语法』呼和浩特：内蒙古人民出版社] [T.Mon]

⇒ 中国領内におけるモンゴル語研究の「教科書」的存在。音声・音韻・形態・統語・語形成論で構成。中国語に翻訳、改訂した版として下記がある。

清格尔泰. 1991. 『蒙古语语法』 呼和浩特: 内蒙古人民出版社. [Chi.]

Nasunbayar, Qaserdeni, Sečen, Čoytu, Dawadayba, Türgen and Naranbatu, eds. 1982. *Orčün čay-un mongγul kele*. Kökeqota: Öbür mongγul-un surγan kümüjil-ün keblel-ün qoriya. [別題: 那森柏・哈斯額爾敦・斯琴・朝格圖・達瓦達布格・圖力更・那仁巴圖『現代蒙古語』呼和浩特: 内蒙古教育出版社.] [T.Mon]

⇒ 「高等学校教材」として編纂。音韻論が弱い反面、他の文法書と異なり統語論にある程度分量を割いている。記述的とはいいがたいが、例文の豊富さ、内容の充実さという点で優れている。

【簡誌】道布編著. 1983. 『蒙古語簡志』北京: 民族出版社. [Chi]

### チャハル方言 Chakhar

中国領内の標準モンゴル語の基礎となっている方言。

Kökebars and Čimeg. 1994. *Üjümčin aman ayalu*. Kökeqota: Öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin keblel-ün qoriya. [T.Mon]

⇒ 筆者未見。チャハル方言の下位方言とされるウジュムチン方言の文法書。

Sechenbaatar Borjigin. 2003. *The Chakhar Dialect of Mongol: A Morphological Description*. [Suomalais-ugrilaisen Seuran toimituksia 243] Helsinki: The Finno-Ugrian Society. [Eng]

⇒ 形態論に特化されているため、参照文法書には含められないが、精緻な記述であるため紹介する。suffix と clitic, word を分析し分けている点が特徴（その基準は示されていない）。モンゴル語の主要方言がこのように総合的にていねいに分析されているものはあまり多くない。

### ホルチン方言 Khorchin

話者数としては中国領内のモンゴル語方言のなかでは最大。漢語話者、満洲語話者との古い時代からの接触により、変容も大きい。

查干哈达. 1996. 『蒙古语科尔沁土语研究』北京: 社会科学文献出版社. [Chi]

⇒ 網羅的で比較的良質。

Bayančoytu. 2002. *Qorčün aman ayalun-u sudlal*. Kökeqota: Öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin keblel-ün qoriya. [別題: 白音朝克圖『科尔沁土语研究』呼和浩特: 内蒙古大学出版社.] [T.Mon]

### ハラチン方言 Kharachin

橘瑞超. 1914. 『蒙古語研究』 大阪：大阪寶文館. [Jpn]

⇒ 日本におけるある程度まとまった分量の初の文法書。モンゴル語經典の翻訳を命じられた著者が、神戸在住だったハラチン出身のモンゴル人の羅子珍（罗布桑却丹; ロブサンチョイドン）氏の協力を得て執筆。音声・音韻はなく、文法と語彙、仏教語彙の対訳、日常会話テキスト等を含む。伝統文法の枠組みに沿っており、たとえば「関係代名詞」の項を設けて「無い」と説明するといった点が特徴的である。

Edquriyaŋči. 1996. *Mongyulŋin aman ayalu*. Ulaŋanqada: Öbür mongyul-un suryan kümüjil-ün keblel-ün qoriya. [別題：額德虎日亚奇『蒙古贞土语』赤峰：内蒙古教育出版社.] [T.Mon]  
⇒ 遼寧省阜新モンゴル族自治州で使用されるハラチン方言の下位方言、モンゴルジン方言の記述文法。文法はスケッチ程度で書籍の2/3は語彙集となっている。

曹道巴特尔. 2007. 『喀喇沁蒙古语研究』 北京：民族出版社. [Chi]

⇒ モンゴル語の中でも漢語（中国語）との接触が大きいハラチン方言の記述文法書。統語に関しては弱いですが、モンゴル語文語、チャハル方言等との比較語彙インデックスなどの配慮がある。漢語によるグロスが付されている。

### バーリン方言 Baarin

Bayarmendü, Borjigin. 1997. *Bayarin aman ayalun-u sudlul*. Kökeqota: Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya. [別題：巴音门德『巴林土语研究』呼和浩特：内蒙古人民出版社.] [T.Mon]

⇒ 実験音声学の手法も用いて音声分析をおこなっている点が特徴的といえる。また接辞の使用等についてもコーパスをもとに統計的に使用状況を示すなど、随所にユニークな点がみられる。グロスはない。

### ナイマン方言 Naiman

旧来ホルチン方言の下位方言とされていたが、ホルチン方言とバーリン方言の中間的位置にあるということがムングングレル (Mönggüngerel) によって主張される。

Mönggüngerel. 1998. *Naiman aman ayalu*. Kökeqota: Öbür mongyul-un yeke surŋayuli-yin keblel-ün qoriya. [別題：孟根格日乐『奈曼土语』呼和浩特：内蒙古大学出版社.] [T.Mon]

⇒ 音韻・品詞ごとの形態論・語彙論。下記博士論文のベースとなっている。

ムングングレル. 2007. 『ナイマン方言の研究』 東京外国語大学博士論文. [Jpn]

⇒ 動画資料等も含むとのことだが、資料は未見。

### オルドス方言 Ordos

テキスト集は数多く出ている一方で文法書はわずかである。これはモンゴル語との差異が比較

的小さいことが原因と推測される。

Soulié, M. G. 1903. *Éléments de Grammaire Mongole (Dialecte Ordoss)*. Paris: Imprimerie Nationale. [Fre]

Sečen, C., M. Bayatur and Sengge. 2002. *Ordus aman ayalyun-u sudlul*. Kökeqota: Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya. [別題：斯钦・巴特尔・森格『鄂尔多斯土语研究』呼和浩特：内蒙古人民出版社] [T.Mon]

⇒ 音声・音韻・形態・語彙。接辞一覧や借用語に関する記述など、ていねいに書いてある印象を受ける。

【諸語】 Georg, Stefan. 2003. Ordos. In: Janhunen, ed. (2003), 193–209.

⇒ 1.2 節で挙げた Janhunen, ed. (2003) 収録のスケッチ。モンゴル語諸方言とは別個に章を設けている。

Sengge, Ĵin Iui. 2010. *Mongyul kelen-ü ordus aman ayalyu*. Kökeqota: Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya. [別題：森格・金钰『蒙古语鄂尔多斯土语』呼和浩特：内蒙古人民出版社] [T.Mon]

⇒ Sečen et al. (2002) からどのようにアップデートされたのかよくわからない。同一の例文や説明で、ほぼ再版ではないかと思われる。

このほか、内蒙古自治区のモンゴル語諸方言を網羅的に概観したものに下記がある。

Todaeva, B. X. 1985. *Jazyk Mongolov vnutrennej Mongolii: ocherk dialektov*. Moskva: Izdatel'stvo NAUKA. [Rus]

⇒ 内蒙古自治区の方言を東部方言（ホルチン，ハラチン，アルホルチン）・中央方言（チャハル，シリングル）・西部方言（オルドス語）に分け概説したもの。ホルチン方言を対象とした音韻論・形態論の記述がある。

【諸語】 Janhunen, Juha. 2003. Mongol Dialects. In: Janhunen, ed. (2003), 177–192. [Eng]

⇒ 分類・音声的な特徴といった概括的な内容。統語論に関する記述はない。

内蒙古自治区地方志办公室编. 2012. 『内蒙古自治区地方志・方言志：蒙古语方言卷』北京：方志出版社. [Chi]

⇒ おもに中国・内蒙古自治区におけるモンゴル語諸方言（チャハル方言，バーリン方言，オルドス方言，アラシャン・エジネ方言，ハラチン方言，ホルチン方言，ブリヤート語バルガ方言（＝モンゴル語バルガ方言））の音韻論・形態論を対照する形で項目別に記述している。また、各方言のテキストも付されている。モンゴル文語による逐語訳は付されているが、グロスと呼べるものではない。参照する点で非常に便利だが、統語論に関する記述がほぼ「無い」というほどに乏しい（音韻論・形態論に 800 頁ほど割いているのに対し、統語論は 12 頁分しかない）。

#### 4.2.6. オイラト語 Oirat

新疆ウイグル自治区、青海省、モンゴル国西部など広範囲に分布する。次項 4.2.7 で紹介するカルムイク語もオイラト語の一方言とみなしてよい言語だが、ひとまず別項とする。カルムイク語を除くと話者数は約 20 万人と推測される。

話者集団はもともとバイカル湖南部～南西部に暮らす「森の民 (Hoi-yin irgen; 森-GEN 民)」に属する一集団だったのではないかと推測されている (Birtalan 2003)。モンゴル帝国期にチンギス・カンに帰属し、モンゴル帝国解体期にモンゴル高原西部で力を強め、近世ではジュンガル帝国を築く。モンゴル文字を改良したオイラト文字 (トド文字) を使用し、近世以降多くの文献が残ることから、文語研究がメインでおこなわれる。文法書でも文語と口語とが明確に区別されていない記述もある。

下位方言に関する文法書がモンゴル国で数点出版されている。ただしモンゴル語で書かれており、モンゴル語がわからないと例文もわからない。「叢書」シリーズでも現地調査が行われているのだが、文法書が未刊となっている (語彙集、テキスト集は刊行済み)。

Coloo, Zh. 1965. *Zaxchiny aman ajalguu*. Ulaanbaatar: BNMAU-yn Shinzhlex Uxaany Akademijn xevlel. [C.Mon]

⇒ オイラト語ザハチン方言を記述した手書き原稿の謄写版印刷。音声・音韻にわずかに形態論を含む。

Vanduj, E. 1965. *Dörvöd aman ajalguu*. Ulaanbaatar: BNMAU-yn Shinzhlex Uxaany Akademijn xevlel. [C.Mon]

⇒ 同じくドゥルブド方言の記述。音声・音韻と形態論・語彙論を含む。上記 Coloo (1965) よりも有用。

Battulga, C. and D. Badamdorzh. 2005. *Ööld aman ajalguuny ojilogo*. Ulaanbaatar: EKIMTO XXK. [C.Mon]

⇒ 音韻・形態のスケッチと語彙。少しもの足りない。

【諸語】 Birtalan, Ágnes. 2003. Oirat. In: Juha Janhunen, ed. (2003), 210–228. [Eng]

⇒ モンゴル国のオイラト語について、モンゴルとハンガリーの科学アカデミーによる合同調査が進行中だが成果は未完 (p.212) との記述がある。その後どうなったか筆者は把握していない。

#### 4.2.7. カルムイク語 Kalmuck

オイラトの一部族、トルグートが 17 世紀に内紛を避けてヴォルガ河畔に移動。その後 1771 年初頭に新疆・イリ地方への帰還をめざすが、暖冬でヴォルガ河が凍結せず、西岸に残ったトルグートが取り残された。これがカルムイクの祖先である。カルムイクという呼称はチュルク系言語の動名詞 *qal-maq* (「留ま-ること」。現代トルコ語で *kalmak*) のロシア語式発音に由来する。一部のトルグートは無事イリ地方に帰還したこともあり、カルムイク語もオイラト語の一方言としてあつかわれることも多い (e.g. Ethnologue)。話者数は約 13 万人。ヨーロッパに分布するという



地理的条件もあり、比較的資料にめぐまれている。とくに口承文芸を中心としたテキストが豊富である。

Bobrovnikov, Aleksandrovich. 1849. *Grammatika Mongoľsko-Kalmyckago jazyka soeinen*. Kazan: Universitetsk. [Rus]

Kotwicz, Władysław. 1929. *Opyt grammatiki Kalmyckogo razgovornogo jazyka*. Izdanie vtoroe, Rzhnevica u Pragi: Izdanie Lalmyckoi komissij kul'turnyx rabotnikov. [Rus]

Sanzheev, G. D. 1940. *Grammatika Kalmyckogo jazyka*. Moskva: Izdatel'stvo Akademij Nauk SSSR. [Rus]

Ochirov, U. U. 1964. *Grammatika Kalmyckogo jazyka: sintaksis*. Elista: Kalmgosizdat. [Rus]

Badmaev, B. B. 1966. *Grammatika Kalmyckogo jazyka: morfologija*. Elista: Kalmyckoe knizhnoe izdatel'stvo. [Rus]

Bitkeev, P. C. et al. 1983. *Grammatika Kalmyckogo jazyka: fonetika i morfologija*. Elista: Kalmyckoe knizhnoe izdatel'stvo. [Rus]

Pjurbeev, G. C. 1977–79. *Grammatika kalmyckogo jazyka: [1] sintaksis prostogo predlozhenija, [2] sintaksis slozhnogo predlozhenija*. Elista: Kalmyckoe knizhnoe izdatel'stvo. [Rus]

⇒ 上記 Bitkeev et al. (1983), Pjurbeev (1977–79) で音韻・形態・統語を一通りカバーできるかたちになっている。

Pjurbeev, G. C. 2010. *Grammatika Kalmyckogo jazyka: sintaksis*. Elista: Rossijskaja Akademija Nauk. [Rus]

⇒ 上記 Pjurbeev (1977–79) の再版。

【諸語】 Bläsing, Uwe. 2003. Kalmuck. In: Juha Janhunen, ed. (2003), 229–247. [Eng]

#### 4.2.8. 東部裕固 (シラ・ユグル) 語 *Shira Yögur (Yughur); Eastern Yögur (Yughur)*

中国で「裕固族」とされる少数民族の一部が使用している。裕固族は東部裕固と西部裕固にわかれ、東部裕固が使用する言語がこの東部裕固語、別名シラ・ユグル語である。話者数約 3–4,000 人とされる。西部裕固はチュルク語族のサリク・ユグル語を使用する。シラ・ユグル、サリク・ユグルともそれぞれの言語で「黄色いウイグル」を意味する。これは伝統的に仏教を信仰してきたことに由来する。

Tenishev, E. R. and B. X. Todaeva. 1966. *Jazyk zheltyx Ujgurov*. Moskva: Izdatel'stvo NAUKA. [Rus]

⇒ チュルク語族のサリク・ユグル語とモンゴル語族のシラ・ユグル語それぞれの音韻・形態・統語・語彙を概括している。ごくわずかなテキストを含む。用例には乏しい。

【簡誌】照那斯图编著. 1981. 『东部裕固语简志』北京: 民族出版社. [Chi]

【叢書】保朝鲁・贾拉森编. 1991. 『东部裕固语和蒙古语』(蒙古语族语言方言研究丛书 016) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社. [Chi]

【諸語】Nugteren, Hans. 2003. Shira Yughur. In: Janhunen, ed. (2003), 265–285. [Eng]

#### 4.2.9. 東郷（ドゥンシャン）語 **Santa; Dunshan; Dongxiang**

「東郷族」とされる少数民族が使用。欧米では Santa と呼ばれることも多い。イスラム教を信仰しており、漢民族からは「蒙古回回」などとよばれていた。シロンゴル・モンゴル語のなかでは比較的話者数が多く、約 20 万人の話者を有するとされる。

Todaeva, B. X. 1961. *Dunsjanskij jazyk*. Moskva: Izdatel'stvo Vostochnoj Literatury. [Rus]

【簡誌】刘照雄编著. 1981. 『东乡语简志』北京: 民族出版社. [Chi]

【叢書】布和编. 1986. 『东乡语和蒙古语』(蒙古语族语言方言研究丛书 007) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社. [Chi]

Field, Kenneth L. 1997. *A Grammatical Overview of Santa Mongolian*. Doctoral dissertation at University of California, Santa Barbara. [Eng]

⇒ 博士論文。派生と屈折, clitic と suffix 等の区別にも配慮している。

【諸語】Kim, Stephen S. 2003. Santa. In: Janhunen, ed. (2003), 346–363. [Eng]

金双龙. 2013. 『东乡语研究』内蒙古大学博士论文。

⇒ 博士論文。新疆ウイグル自治区と甘粛省の東郷語の記述。音韻論に多くが割かれているが、形態論はごく簡単な素描に終わっている。2020 年に書籍としても刊行されている（金双龙. 2020. 『东乡语研究』北京: 民族出版社）。

Napolis, Mateus Froes. 2014. *Studies on the Verb Complex of Santa Mongolian*. PhD thesis at the Payap University, Thailand. [Eng]

⇒ 動詞の屈折にフォーカスした博士論文だが、音韻論・形態論・統語論の概述を含み、巻末にテキストが数編付されている。

#### 4.2.10. 康家（カンジャ）語 **Kangjia**

1988 年に初めて調査された言語で、民族としては回族が使用する。話者数は 500 人弱。次項の保安語に近いとされるが、格形式などが異なる。

斯钦朝克图. 1999. 『康家语研究』上海: 上海远东出版社. [Chi]

⇒ この文献が唯一の文法書。有用。

#### 4.2.11. 保安（ボウナン; バオアン）語 Bonan; Bao'an

「保安族」とされる少数民族が使用する。話者数は約1万人と推定される。日本国内では佐藤暢治氏（広島大学）が記述研究に従事している。

Todaeva, B. X. 1966. *Baoan'skii jazyk*. Moskva: Nauka (AN SSSR Institut narodov Azij). [Rus]

【簡誌】 布和・刘照雄编著. 1981. 『保安語簡志』北京：民族出版社. [Chi]

【叢書】 陈乃雄编. 1987. 『保安語和蒙古語』（蒙古語族語言方言研究叢書 010）呼和浩特：内蒙古人民出版社. [Chi]

【諸語】 Hugjiltu, Wu. 2003. Bonan. In: Janhunnen, ed. (2003), 325–345. [Eng]

Fried, Robert Wayne. 2010. *A Grammar of Bao'an Tu, A Mongolic Language of Northwest China*. Ph.D dissertation at the University of Buffalo, State University of New York. [Eng]

⇒ ボウナン語はイスラム教を信仰する「保安族」の言語とされるが、チベット仏教を信仰する「土族」（モンゴル族）の一部も同言語を使用する。この土族が使用するボウナン語を、Dixon (2010) の枠組に基づいて記述した博士論文。用例も多く、良質な文法書である。この文法書では格標識は clitic と分析。

佐藤暢治. 2011. 『保安語積石山方言のテキスト』白帝社. [jpn]

⇒ 記述文法ではなくテキストだが、文法概略を含む。

#### 4.2.12. 土族（モンゴル）語民和方言 Mangghuer; Minhe Monguor

本項民和方言と次項の互助方言は、土族語 (Monguor) として一言語にくくられている (cf. 栗林 1992: 518)。しかしながら両言語コミュニティは異なる文化的背景を有すること、相互理解が困難なことなどから、とくに欧米では近年この両言語を別個の言語と見なすようになっている。両言語ともに「土族」とされる少数民族が使用する。「土族」の名称は「土着の」の意味に基づいているとされる。民和方言話者は約2万5,000人 (Slater 2003a)。互助方言に比べて民和方言は研究が進んでいないが、Slater (2003b) は良質な文法書である。

Slater, Keith W. 2003. *A Grammar of Mangghuer: A Mongolic Language of China's Qinghai-Gansu Sprachbund*. London and New York: Routledge Curzon. [Eng]

⇒ 包括的な文法書としては唯一か。名詞の格標識が他と異なり clitic であると規定されている。

【諸語】 Slater, Keith W. 2003. Mangghuer. In: Janhunnen, ed. (2003), 307–324. [Eng]

#### 4.2.13. 土族語互助方言 Mongghul; Huzhu Monguor

前項民和方言に比べると先行研究に恵まれている（が、それでも多いわけではない）。話者数は5万人以下 (Georg 2003)。1920–30年代に調査したモスタールトとシュミットによる記述（音韻・文法・辞書の三部作）が精緻で、長らくこの記述が参考にされてきた。

Smedt, Albert and Antoine Mostaert. 1929–31. *Le dialecte monguor, parlé par les Mongols du Kansou occidental Ière partie: Phonétique, Anthropol.* 24: 145–166, 801–815; 25: 657–669, 961–973; 26: 253. [Fre]

⇒ 音韻論

Smedt, Albert and Antoine Mostaert. 1933. *Le dialecte monguor, parlé par les Mongols du Kansou occidental IIIe partie: Dictionnaire monguor-français.* Pei-p'ing: Imprimerie de l'Université Catholique. [Fre]

⇒ 辞書

Smedt, Albert and Antoine Mostaert. 1964. *Le dialecte monguor, parlé par les Mongols du Kansou occidental IIe partie: Grammaire.* [2. éd.] (Uralic and Altaic Series 30.) Hague, London and Paris: Mouton co. [Fre] (初版は1945. Peking: The Catholic University)

⇒ 文法書

Todaeva, B. X. 1973. *Mongorskii jazyk: Issledovanie, teksty, slovar'.* Moskva: Nauka (AN SSSR Institut vostokovedenija). [Rus]

⇒ 文法・テキスト・語彙がセットになっている。互助方言を基本とし、音韻論・形態論では民和方言にも触れている。表記がキリル文字にもとづく音素表記となっており、慣れないと読みづらい。

【簡誌】照那斯图编著. 1981. 『土族语简志』北京: 民族出版社. [Chi]

【叢書】清格尔泰编. 1991. 『土族语和蒙古语』(蒙古语族语言方言研究丛书 013) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社. [Chi]

⇒ いずれも互助方言の記述もわずかに含む。「叢書」は比較的詳細に記述されている。

【諸語】Georg, Stefan. 2003. Mongghul. In: Janhunen, ed. (2003), 286–306. [Eng]

#### 4.2.14. モゴール語 Moghol

アフガニスタンに暮らすモゴールと呼ばれる集団が母語とする。アフガニスタンの政情から、モゴール語は現地調査が困難である。おそらく死語、もしくは極めて死語に近い状態にあると推測される。なお、「服部四郎が調査を行い、録音資料を得た（1961年）……（中略）……服部四郎の持ち帰った資料は現在、島根県立大学の所蔵となっている」（斎藤 2012: 88）という。

Weiers, Michael. 1972. *Die Sprache der Moghol der Provinz Herat in Afghanistan* (Sprachmaterial, Grammatik, Wortliste). Opladen: Westdeutscher Verlag. [Ger]

⇒ テキストや語彙などの資料は出ているが、文法がある程度まとまった形であらわされたものはこの1点のみか。文法書としては分量が少なめだが、限られた資料のもとでまとめられている点を考えると充実しているといえる。ドイツ語対訳つきのテキストが音韻・文法よりも先に配置されている不思議な構成。テキストにグロスはない。

Böke, ed. 1996. *Moyul kelen-ü sudulul*. Kökeqota: Öbür mongyul-un yeke suryayuli-yin keblel-ün goriya. [別題：布和『莫戈勒语研究』呼和浩特：内蒙古大学出版社。] [Chi]

⇒ フィールドワークは行わず、先行研究およびテキスト等にもとづいてまとめられた文法書。音韻・形態・統語・語彙を一通り網羅。グロスはないが、モンゴル語で逐語訳がなされている。

#### 4.2.15. 契丹語 Khitan

モンゴル語族に含まれるかどうか、まだ解決されていないが、Janhunen (2003e) は契丹語を Para-Mongolic として、現在のモンゴル諸語とは別に祖語から分岐した言語であろうと位置付けている。契丹小字・契丹大字という二種の文字による記録がある。長らく未解読であったが、近年新資料が多数発見されており、解読がすすむとともに文法も少しずつ明らかにされている (cf. 大竹 2015a, 2015b, 2016, 2020, Takeuchi 2015, 武内 2016, 2017, etc.)。参照文法書と呼べる類のものはないが、比較的体系的なものについて記載する。

吳英喆. 2007. 『契丹語静词语法范畴研究』呼和浩特：内蒙古大学出版社. [Chi]

⇒ 名詞形態論を扱った単著。

Daniel, Kane. 2009. *The Kitan Language and Script*. (Handbook of Oriental Studies Series, Section 8: Uralic and Central Asian Studies.) Leiden: Brill. [Eng]

⇒ 文字素論・形態論等の記述に加え、語彙・テキストを含む。

武内康則. 2013. 「契丹語の研究」京都大学博士論文. [jpn]

⇒ 研究史・文字解読・音韻論・形態論・統語論を含む。文字解読・音韻論が多くを占めており、形態論・統語論の記述は少ない。

## 5. モンゴル語族を対象とした参照文法書の特徴

### 5.1. 全体にわたる特徴

文法書の多くが、以下のような構成になっている。研究の背景が異なる国ごとにもう少し特徴があらわれるかと思ったが、差異はあまり見られない。

#### 1. 音声・音韻論

母音 (短母音・長母音・二重母音・母音調和)

子音

音節構造

子音連続

形態音韻規則

アクセント (← 非弁別的であるためか、非常に簡略な記述にとどまるケースが多い)

## 2. 形態論

品詞分類

名詞類 (名詞・名詞の屈折：格の用法・代名詞：人称、指示・形容詞・数詞・場所名詞、etc.)

動詞 (動詞の屈折：定動詞 (直説法、希求法)、形動詞、副動詞・動詞の態：使役、受動、相互、協同など・指示動詞・補助動詞・動詞連続)

不変化詞類 (副詞・接続詞・文末小詞・感動詞など)

## 3. 統語論

疑問文・複文の構造など (← 簡略な記述が多い)

以下、いくつか多くの先行研究に共通する問題点を挙げる。

### 統語に関する言及が少ない

音韻・形態に分量の多くが割かれ、統語については簡潔にまとめているものが目立つ。後述するが、形態論で品詞別の機能について言及しており、そこで他の語句との修飾構造も説明されることによるのか。ただしこうした文法書の構成は、とくに言語の構造を把握していない読者にとって Referential という点では不便である。

### 例文にグロスがない／形態素境界が示されていないケースが多い

20 世紀中盤までの文法書ではロシア・ドイツなどで出版されたものもグロスがない。近年解消されてきているが、「叢書」シリーズのようにモンゴル圏 (モンゴル国・中国内蒙古自治区・ブリヤートなど) で出版されるものはまだグロスがないものも多い。「モンゴル語を理解する読者」を対象として想定していることにより、モンゴル語からのある程度の類推がきくことが背景にあると思われる。そもそもグロスをつけるというのは文法を書く際にどの程度「当然」のこととして認識されているのだろうか。

### モンゴル語との比較を前提として記述されており、モンゴル語の知識が求められる

たとえば「叢書」シリーズがこのタイプである。「モンゴル語では○○のようにあらわすが」といった説明が多い。これは比較がそもそも文法書の目的となっていることに起因する。ツングース語族 (Ikegami 1974) は語族内の系統関係がある程度解明されているのに対し、モンゴル語族は内部の系統関係が十分に解明されていない。そのためか、それぞれの文法記述においても常にモンゴル語との比較が念頭におかれる。その際、モンゴル文語が比較対象となることが多い。これは有益な場合もあるが、当該言語とモンゴル文語を比較対照する意義があるのかどうか疑わしいケースもある。というのも、モンゴル文語は「祖語」の状況を示しているわけではなく、現存するモンゴル諸語すべてが文語であらわされる音韻・文法体系にさかのぼれるわけではないためである。たとえばシロンゴル・モンゴル諸語 (河湟語) とくらわれる言語群は単に文語との比較で

は十分に理解が進まない。

### ロシア（ソ連圏）における文法記述の枠組みに拠っているものが多い

Poppe（やそれ以前のロシア・旧ソ連の研究者）らが先駆となっていること、またモンゴル国も社会主義時代はソ連の影響を大きく受けていたことから、モンゴル語文法はロシア語文法の枠組みに沿って記述される傾向にある。たとえば動詞の屈折が「定動詞」「形動詞」「副動詞」という範疇に下位区分されたり、屈折範疇に含まれない（と筆者が考える）名詞の「数」標示が数・格の体系としてまとめて章立てされていたり、という点が特徴的である。動詞の屈折に関する記述は、中国側の文法記述でも踏襲されている。

### 「非文」の記載を欠くものが多い

これはモンゴル語族の文法書に限った問題ではないと思われるが、「非文」つまり文法構造上適格ではない例を載せている文法書が少ない。ただし Slater (2003b), Fried (2010) といった最近の記述文法書には非文も提示されている。死語や文献に頼らざるを得ない言語はさておき、そうではない言語に関しては多少なりとも非文の例があってほしい。

## 5.2. 各論における諸問題

### 5.2.1. 音声・音韻論

#### 表記法

「叢書」をはじめ、とくに中国側の記述に多い問題点として、表記が音素表記であるのか、簡略な音声表記であるのかが不明瞭である点があげられる。音素表記としては複雑な体系に見えるケースがある。一方、Janhunen 氏をはじめ近年の欧米の研究者による参照文法書はこの区別が明確である。

#### アクセントの記述

アクセントの記述が簡素で、問題がある。とくに中国で出されているモンゴル語・モンゴル語諸方言の参照文法においては、母音調和の法則（語内部の母音の共起制限／語内部の先行音節に基づいて後続音節の母音の音価に制約がでる）に依拠していることが原因なのか、『語頭』もしくは『長母音・二重母音を含む音節』がある場合にはそちらにアクセントが置かれる」（e.g. Poppe 1951: 13）といった記述がある（ただしこれについては細部で記述が異なる。Luvsanvandan, ed. (1966: 46) は「母音の長短に関わらず常に第一音節に置かれる」、清格尔泰 (1991: 76) は「重音は第一音節に固定されており、音高（筆者注：ピッチ）は第二音節で高くなる」としている）。モンゴル語やオイラト語、カルムイク語などでは第2音節以降の短母音があいまい母音化するため、これを弱化ととらえれば相対的に第一音節や長母音・二重母音を含む音節が「強い」ことになるが、いわゆる「強勢」の分布とは異なる。高さアクセントについては第一音節／長母音・二重母音を含む音節が高くなるということはない。記述の不正確さに加え、強弱アクセント・高低アクセントの別がなされていない点が問題の原因と言える。

シロンゴル・モンゴル諸語ではアクセント（中国語では「重音」）が最終音節に置かれるという記述がされる<sup>6</sup>が、こちらについても強弱アクセントか、高低アクセントかの区別はなされていない。こうしたシロンゴル・モンゴル諸語の記述においても「第一音節に『重音』が固定され

<sup>6</sup> 角道 (2001: 82) は「東部裕固語、土族語、保安語、東郷語のアクセントが最後の音節にあるというようなことは軽々しくは言えない」と指摘している。

るモンゴル語とは異なり…」(e.g. 陈编 1987: 72) といった説明がある。こうしたアクセント記述が誤りであることはすでに指摘されているのだが、いまだに『アクセントは第一音節』が通説である(宝音 2014) といった言説が、とくにモンゴル人研究者の間で通用している。

### 音韻解釈

モンゴル語ハルハ方言など、第二音節以降の短母音が著しく弱化する言語に関しては Svantesson et al. (2008) のように第二音節以降に母音の長短を認めないとする音韻解釈や、第二音節以降の母音音素をすべて /ə/ とする解釈(フレルバートル・栗林 1997) もある。このような点をふまえても、音声・音韻に関してはまだまだ未解決なところが多いことがうかがえる。モンゴル語の音声・音韻に関しては上記 Svantesson et al. (2008) のほか、日本国内でも植田尚樹氏による一連の研究(植田 2013, 2014, 2018, 2019) が出ており、他の言語についても研究の進展が待たれる。

### 5.2.2. 形態論

#### 「語」の規定とそれに関する問題

自立語・付属語・付属形式をどう区分するべきか、説明があつてしかるべきだが、それを欠いている。Slater (2003b), Fried (2010), Janhunen (2012) など近年の文法書では clitic の規定とともに説明されている。このうち Slater (2003b), Fried (2010) はともに格標識の自立性が高いとみられる言語(土族語民和方言, 土族が使用する保安語)を対象としている点も特徴的である。

「語」の規定が不十分なため、音韻的には2語であるような語結合が「複合」として語形成法のひとつに含められているところも、多くの先行記述に見られる問題点の一つである。もちろん、それを「複合」とみなす根拠が説明されていればよいが、そのような説明は欠いている。なお自立語・付属語の境界に関する重要な論考として梅谷 (2013a, 2014) がある。付属語・付属形式の境界に関しては山越 (2004, 2007b) も言及している。

### 品詞分類

品詞分類については、Kullmann and Tserenpil (1996) を除くとほとんどが「名詞類(格接尾辞を接続しうる語類)・動詞(「活用」接尾辞を接続しうる語類)・不変化詞類」という上位分類と、それぞれの下位分類で品詞を設定している。しかし、上位分類が形式による分類なのに対し、下位分類が機能による分類になっているケースがある(表2)。とくに不変化詞類についてはその傾向が顕著である。品詞分類についてはモンゴル語族全般に共通して、もう少し慎重に考える必要がある。しかし品詞分類に関する議論は梅谷 (2013b, 2015), 山越 (2008) などにとどまり、モンゴル諸語研究における関心の対象とはなっていない。



表2 (参考) いくつかの文法書におけるモンゴル語の品詞分類

Luvsanvandan, ed. (1966)		Kullmann and Tserenpil (1996)		Janhunen (2012)		清格尔泰 (1991)		
Нэр үг (noun)	Жинхэнэ нэр (substantive)	Concrete parts of speech	Noun		Nominals	Proper	靜詞類	名詞
	Тэмдгийн нэр (adjective)		Verb			Spatial		形容詞
	Тооны нэр (numeral)		Adword	Adjective		Adjective		數量詞
Үйл үг (verb)			Adverb		Numeral		時位詞	
Дайвар үг (adverb)			Numeral		Pronoun		代詞	
Төлөөний үг ('proword')			Proword		Verbals			動詞
Дагавар үг (postposition)		Abstract parts of speech	Postposition		Invariables	Adverb <sup>7</sup>	不變化詞類	副詞
Сул үг (particle)	Conjunction		Particle					情態詞
	Particle		Interjection				摹擬詞	
	Interjection						後置詞	
								語氣詞
								連接詞
								感情詞

派生か屈折か

付属形式については、派生と屈折の線引きについても十分な基準を示しているものはないように思われる。ポップな図式(図1)で派生と屈折の別を解説している Kullmann and Tserenpil (1996) のようなものもあるが、同書でもその基準をどこに置くかは示していない。

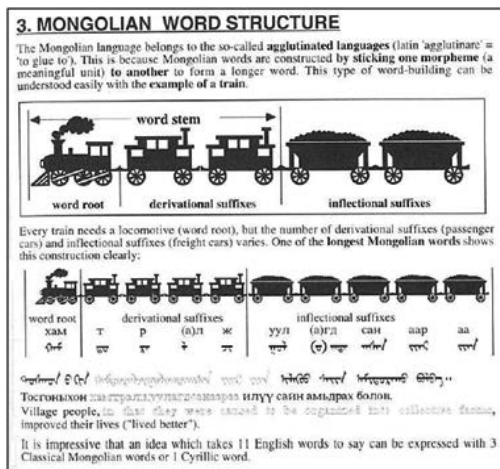


図1 語根・語幹・派生・屈折の解説 (Kullmann and Tserenpil 1996: 33)

<sup>7</sup> Janhunen (2012: 58) は Adverb については積極的定義はしていない。auxiliary や conjunction, postposition, interjection なども含むとしており、いわゆる「品詞のゴミ箱」として副詞を設定している。筆者も Yamakoshi (2011) などで同様の品詞分類をおこなっている。

このほかに、たとえばどこまでを格接尾辞と認めるか、どこまでを動詞の屈折範疇と認めるかという点において、周辺の形式を含めるか否かが文法書毎に異なっている。あくまで印象だが、モンゴル語母語話者による記述のほうがより多様な格（表3）・多様な屈折体系があるように記述する傾向がある印象を受ける。

表3 （参考）ダグール語の格体系（恩和巴图 1988 と Tsumagari 2003 の比較）

恩和巴图 1988	Tsumagari 2003
基本格	主格（接辞なし）
	Nominative（接辞なし）
	領格 -i, -ui, -ji
	Connective -ii, [y]-ii, u-i, -y
	賓格 I -i, -ui, -ji
	賓格 II -i:ju, -uiju, -ju（不定対格?）
	—
	与位格 -d
	Dative -d
	凭借格 -A:r (-a:r, -o:r, -ə:r), -e:r, -jA:r
	Instrumental -AAr, [y]-ier, [w]-oor, -y-AAr
	界限格 -A:r(s), -e:r(s), -jA:r(s)
	Ablative -AAs, [y]-ies, [w]-oos, -y-AAs
	共同格 -ti:
	Possessive -tii
非基本格	程度格 -ŋA:r
	—
	確定方位格 I -kA:kəl
	—
	確定方位格 II -kA:ki:
	—
	不定方位格 I -A:tən, -e:tən, -jA:tən
	—
	不定方位格 II -A:kul, -e:kul, -jA:kul
	—
	由来格 -A:ta:r(s), -e:tA:r(s), -jA:ta:r(s)
	—
	方向格 -dA:
	—
	目標格 -mA:ji
	—
	定格 -n
	—

### 派生接尾辞の共時的記述

モンゴル語族の言語は多様な派生接尾辞を有する。それをまとめた先行研究としてたとえば塩谷 (2006) がある。しかしながら、その共時的な生産性についての言及がないものがほとんどである。実際には生産的ではないにもかかわらず、通時的側面から当該形態素を抽出し、派生接尾辞として認めているものも多く、いたずらに複雑に記述する傾向がある。たとえば Luvsanvandan, ed. (1966: 78–85), Kullmann and Tserenpil (1996: 42–56) などがそれに該当する<sup>8</sup>。

### 動詞形態論

従来の先行記述のほとんどは、1.1 で触れたように動詞の屈折を定動詞 (finite), 形動詞 (verbal noun/participle), 副動詞 (converb) の三つに大別し、記述している。形動詞・副動詞というカテゴリーは、ロシア語文法における причастие, деепричастие を適用したもので、これが広くアルタイ諸言語の記述にも適用されている。しかしながら、主節述語専用の形式である定動詞は別として、形動詞・副動詞のカテゴリー内の諸形式の機能は、それぞれ均質ではない。たとえば形動詞に分類される諸屈折形式は定動詞に比べ「名詞性」を有しているといえるが、その「名詞化」の

<sup>8</sup> ただし Kullmann and Tserenpil (1996) は頻度（生産性）についても言及している。

度合いは異なる（山越 2012a）。もう一方の副動詞は、従属節述語としての機能と、動詞連続の先行要素となる機能があるが、前者の機能しかもたない形式、後者の機能しかもたない形式、双方の機能をもつ形式と連続的である。さらに、形動詞に格接尾辞を伴った形式をも副動詞に分類する記述もあるが、その一方 Janhunen (2012) や Napoli (2016) はこれを quasi-converb としている。

従来の三つに大別する記述が妥当なのかどうかは近年になって再検討されるようになっており、Field (1997), Slater (2003b), Fried (2010) のように、non-finite と finite を区別することに定める記述が近年では増えている。なお、古いものでは橘 (1914) が定動詞・形動詞・副動詞の枠組みによらず、伝統文法的な記述をしているところが目を引く（図 2）。

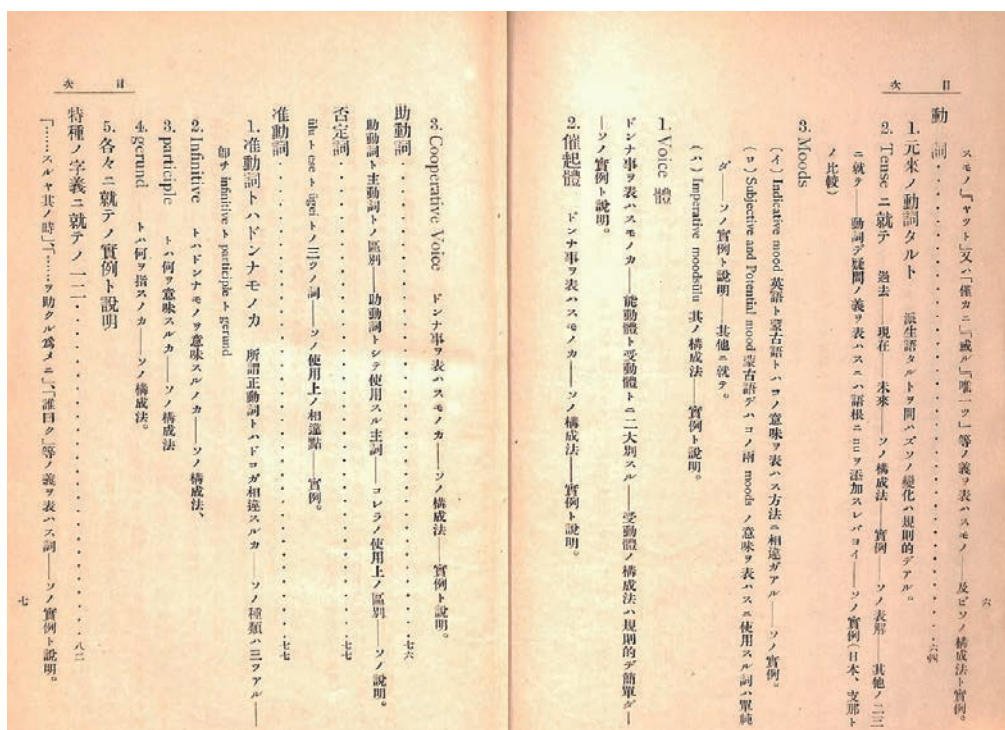


図2 橘(1914)の目次(動詞形態論)

このほか、voice/aspect に関わる形態素を屈折接尾辞とみなすか、派生接尾辞とみなすかといった問題もある。上記定動詞・形動詞・副動詞のカテゴリーに分類される接尾辞（← 語幹に接続する）とは異なり、voice/aspect に関わる形態素はそれよりも「内側」に接続する。たとえば下の (1b) にあらわれる使役接辞 *-uul* (代表形 *-UUI*) は、動詞語根 *zod-*「殴る」と形動詞完了接辞 *-sAn* との間にあられる<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> 以下、例文はモンゴル語ハルハ方言による。表記はモンゴル国のキリル文字による正書法をラテン字に置換したものに、若干音韻解釈をほどこしたものである。なお、モンゴル諸語のいくつかには母音調和の法則（単語内部の母音の順行同化規則）による複数の異形態をもつ拘束形態素が存在するため、そのような拘束形態素については *-sAn* のように母音大文字を用いた代表形を示す。

- (1) a. *dorzh bat-yg zod-son.*  
 PN PN-ACC hit-PTCP.PFV  
 ドルジがバトを殴りました。
- b. *bat dorzh-d zod-uul-san.*  
 PN PN-DAT hit-CAUS-PTCP.PFV  
 バトがドルジを殴りました。(山越 2012b: 258)

(1b)にあらわれている *-uul* を屈折接尾辞とみなす場合、動詞語幹は *zod-* となる。一方これを派生接尾辞とみなす場合は *zod-uul-* が動詞語幹ということになる。「卵が先か鶏が先か」のような議論になるが、つまり「語幹」をどのように定義するかという問題と、voice/aspect 接辞を屈折範疇に含めるか、派生接尾辞とみなすかという問題が連動している。現状、動詞形態論のなかでこれをどう位置付けるかはあいまいに片づけられているケースもみられる。筆者自身は voice/aspect 接辞を接続した形式に出動名詞派生接尾辞が接続する (=2) ことを根拠に、voice/aspect 接辞は(出動動詞)派生接尾辞だと位置づけている。しかしたとえば Kullmann and Tserenpil (1996: 33) は、voice/aspect に関わる接尾辞を屈折接尾辞とみなしている。

- (2) *ögüül-* → *ögüüle-xiün*  
 mention- mention-NMLZ  
 述べる 述語(述べるもの)
- ögüül-* → *ögüüle-gde-* → *ögüüle-gde-xiün*  
 mention- mention-PASS- mention-PASS-NMLZ  
 述べる 述べられる 主語(述べられるもの)

屈折接尾辞とみなす立場についても、もちろんその根拠が述べられていればよい。しかしこの派生/屈折の区別に関する問題に限らず、モンゴル諸語に関する参照文法書の多くはそうした根拠の提示が欠けている。

### 5.2.3. 統語論

統語に関する記述は(ロシアで書かれたブリヤート語の Bertagaev and Cydendambaev (1962), カルムイク語の Pjurbeev (1977-79) のようなケースはあるが)、全体を通じてかなり貧弱だといえる。参照文法書として統語論を比較的ていねいに扱っているものにはこのほか Kullmann and Tserenpil (1996), Fried (2010), Janhunen (2012), などがある。たとえば Janhunen (2012) は *phrasal syntax, clausal syntax, complex sentences* と 3 段階に分けて詳細に記述している。ただしモンゴル語族の諸言語は徹底した主要部後置型であり、*pro-drop* であることから、とくに動詞を主要部とする構造に関しては *phrase* か *clause* かを区別するのは困難であるように筆者は感じていることもあり、どのような構成で記述すべきかは今後検討する必要がある。

統語論の記述が貧弱であることには以下のような理由があるだろう。述語動詞が文末に位置さえすれば語順は比較的「自由」<sup>10</sup>であること、先述の通り形態論のなかで他の語句との修飾構造

<sup>10</sup> しかし、語順が「自由」であるかどうかは慎重に検討する必要がある。語順は情報構造その他、重要な文法事項に関わっていると考えられるためである。

も説明されることが多く、そこで「言い尽くした」感があることなどである。

こうした、形態論の項で統語構造に関する記述も含めるとい構成それ自体が、モンゴル語族(やアルタイ諸言語)の特徴があらわれているとも言い換えられる。拘束形態素の接続が単に語形成に関与するだけでなく、格接尾辞や分詞・副動詞接尾辞などは「他の語句との修飾構造を示すために従属部に接続する要素」として用いられるため、同時に主要部も示さないと機能を十分に説明できない。そのため形態論のなかで修飾構造も記述せざるをえない。だが、他の語句との関係を形態論の項目で論じてしまうことで、「形式ごとに説明しているはずが機能(他の語句との関係)にすり替わってしまう」パターンもある。たとえば次の「目的語」「使役・受動」に関する議論がそれに該当する。

### 「目的語」の記述

前世紀の記述文法では「目的語」は形態論・対格の項で説明されることが多い。しかしながら、いわゆる他動詞文における動作の対象がとりうる形式は対格のみではない(3)。

- (3) a. *ter ene nom-iig unsh-zh bai-n.*  
 that this [book-ACC]<sub>O</sub> read-CVB.IPFV be-IND.PRS  
 彼がこの本を読んでいます。
- b. *tend bat nom unsh-zh bai-n.*  
 there PN [book]<sub>O</sub> read-CVB.IPFV be-IND.PRS  
 そこでバトが本を読んでいます。
- c. *tend bat nom-oo unsh-zh bai-n.*  
 there PN [book-REFL]<sub>O</sub> read-CVB.IPFV be-IND.PRS  
 そこでバトが自分の本を読んでいます。(山越 2012b: 63-64)

(3a-c)のボールドの部分か動詞 *unsh-*「読む」の動作対象にあたる。いわゆる DOM (Differential Object Marking) であり、動作の対象となる事物の定性や動作主体との対比による有生性、動作主体との関係(所有物か否か)などの関与により、動作対象が対格接尾辞を接続して対格(3a)となるか、無標形(3b)となるか、再帰所有接尾辞を接続(3c)するかが決まる。このとき、先行研究ではこの動作対象をアプリアリに「目的語」とみなしているが、その定義の根拠を明示しているものはない。さらに、仮にこれを「目的語」としたとしても、この目的語の形式選択は本来「統語論」で扱われるべき現象である。しかし、たとえば「叢書」シリーズではこの使い分けを等しく「詞法(=形態論)」の「対格」の項目で扱っている。(3b)のような無標形(これをどう呼ぶかも検討の余地がある<sup>11</sup>)を「領賓格(=属対格<sup>12</sup>)」が省略されたもの(保朝魯・贾拉森編 1991: 156; 下線は筆者による)とみなしたり、「主格的な形式が用いられる」(陈编 1987: 99; 同じく下線は筆者による)としながら「主格」の項でそれにふれていなかったりという記述がなされている。つまり、形態論の章で「形態」ごとに項目を立てる必要がありながら、それが「機能」にすり替

<sup>11</sup> モンゴル諸語の多くでは、この無標形は主格形と同一の形式となる。そのような言語ではこれを主格と呼んでも問題はない(が、そう記述している参照文法は少ない)。なお、モンゴル諸語同様に無標形が目的語となりうるチュルク諸語に関して、江畑(2014)はこの無標形を主格形と呼んでいる。

<sup>12</sup> 「叢書」シリーズで扱われている河湟語、ダゲール語では普通名詞の属格形と対格形が同じであるため、これを属対格(原文では「領賓格」)とよびあわしている。これを Janhunén, ed. (2003) は connective と呼ぶ。connective については Janhunén (2003f) に解説がある。

わっているという状況がみられる。このように、「目的語」の記述は文法書の構成上大きな問題を含んでいる。

### 「使役・受動」の記述

こちらでも文法書では動詞形態論のなかでも論じられる。たとえばモンゴル語では使役動詞は接尾辞 *-UUI* もしくは *-lgA* が動詞語幹に接続することで派生される<sup>13</sup>。そのため形態論の項で当該接尾辞の接続法について記述する際に、(4) のような例文とともに「使役文」の説明がなされる。

- (4) a. *bagsh tiun-eer sambar shiree arch-uul-v.*  
 [teacher]<sub>CAUSER</sub> [that-INS]<sub>CAUSEE</sub> [blackboard table]<sub>O</sub> wipe-CAUS-IND.PST  
 The teacher had her clean the blackboard and the table.  
 (Kullmann and Tserenpil 1996: 118)
- b. *suragch-d-aar sandal shiree zöö-lgö-v.*  
 [pupil-PL-INS]<sub>CAUSEE</sub> [chair table]<sub>O</sub> carry-CAUS-IND.PST  
 (Someone) had the pupils move the chairs and tables.  
 (Kullmann and Tserenpil 1996: 119)

それと同時に、「被使役者は具格または与位格であらわされる<sup>14</sup>(=(4))」「使役構文が受動もあらわしうる(=(5))」というような、統語に踏み込んだ内容まで同項目で説明されてしまう。もちろん被使役者の格標示は名詞形態論の格接尾辞の項目でも説明されるが、できれば相互参照付きで統語論で扱ったほうがより理解しやすい。こうした相互参照のしやすさといった点に配慮した文法書が欠けている。

- (5) a. *dorzh bat-yg zod-son.* → *bat dorzh-id zod-uul-san.* (=1)  
 PN PN-ACC hit-PTCP.PFV PN PN-DAT hit-CAUS-PTCP.PFV  
 ドルジがバトを殴りました。 バトがドルジに殴られました。
- b. *chono xurga id-sen* → *xurga chonon-d id-iüül-sen.*  
 [wolf]<sub>S</sub> [lamb]<sub>O</sub> eat-PTCP.PFV lamb wolf-DAT eat-CAUS-PTCP.PFV  
 狼が子羊を食べました。 子羊が狼に食べられました。  
 (山越 2012: 258)

## 6. おわりに

以上、モンゴル語族の言語・方言を対象とした文法書について概観してきた。5 節でおおよその問題点について列挙してきたことを総合すると、モンゴル語族を対象とした文法書はこれまで多くの場合、読み手が「モンゴル語の基本的構造を理解している」ことを前提に編まれていたこ

<sup>13</sup> 前述のように、これを「派生」とみなしてよいかどうかは研究者によって見解が異なると思う。筆者は前項(2)で示した根拠に基づき、これを使役動詞の派生とみなす。

<sup>14</sup> 使い分けに関しては先行記述でさまざまな説明がなされているが、与位格を使った使役文と具格を使った使役文とでは、前者のほうが被使役者に対する使役者の当該行為を実現させようとする働きかけが弱い、と梅谷(2008)が示している。

とに起因するものと思われる。しかしながら、90年代後半以降の非母語話者による文法記述は精緻であり、その成果となる記述文法書も読み手を限定しない良書 (e.g. Field 1997, Slater 2003b, Fried 2010, Janhunen 2012, etc.) が目立ってきているのは好ましい傾向である。ただしそれは語族内の周辺言語を対象としているものが多く、今後語族内の主要な言語において、こうした文法書が記述されるようになるかどうかはわからない。より主要な言語、つまりモンゴル語の文法書は、そこに教育という側面、つまり規範文法という面も影響してくるためである。そうした問題はあるが、今後記述的な参照文法書がよりいっそう充実することに期待したい。

## 略号

[ ]<sub>A</sub>: Agent, [ ]<sub>O</sub>: Object, [ ]<sub>S</sub>: Subject, ACC: accusative, CAUS: causative, CVB: converb, DAT: dative-locative, E: epenthesis, IND: indicative finite, INS: instrumental, IPFV: imperfective, NMLZ: nominalizer, PASS: passive, PFV: perfective, PL: plural, PN: proper noun, PRS: present, PST: past, PTCP: participle, REFL: reflexive

注3で示した通り、書誌情報末尾に [ ] でくくった以下の略号は、当該文献の記述言語を指す。

[Chi] Chinese, [C.Mon] Cyrillic Mongolian, [Eng] English, [Fre] French, [Ger] German, [Jpn] Japanese, [Rus] Russian, [T.Mon] Traditional Mongolian

## 謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」(2016-2017年度)の成果の一部である。本稿は同課題の第1回研究会(2016年7月24日)での発表に基づく。同じく共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語の言語変容—外的要因と内的要因—」(2018-2020年度)の成果でもある。作成・加筆に際してはJSPS 科研費 JP17K02714, JP18K00521, JP18H03578 の助成を受けた。

## 参考文献

- 保朝魯・贾拉森編 1991 『东部裕固語和蒙古語』(蒙古語族語言方言研究叢書 016) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- 宝音 2014 「現代モンゴル語ハラチン方言のアクセントについて」日本モンゴル学会 2014 年度春季大会 (於 静岡大学)。
- Bertagaev, T. A. and C. B. Cydendambaev. 1962. *Grammatika burjatskogo jazyka: Syntaksis*. Moskva: Izdatel'stvo vostochnoi literatury.
- Birtalan, Ágnes. 2003. "Oirat." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 210-228.
- Bläsing, Uwe. 2003. "Kalmuck." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 229-247.
- 陈乃雄編 1987 『保安語和蒙古語』(蒙古語族語言方言研究叢書 010) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- 戴庆厦・刘菊黄・傅爱兰 1987 「云南蒙古族嘎卓语研究」『语言研究』12(1): 151-175.
- Dixon, R. M. W. 2010. *Basic Linguistic Theory* vol.1-3. Oxford: Oxford University Press.
- Dwyer, Arianne M. 2016. "Ordinary Insubordination as Transient Discourse." *Insubordination* (Nicholas Evans and Honoré Watanabe, eds.) (Typological Studies in Language 115), 183-208, Amsterdam: John Benjamins.
- 江畑冬生 2014 「サハ語・トルコ語・トゥバ語の目的語格標示」『北方言語研究』4: 33-42.
- 恩和巴图 1988 『达斡尔語和蒙古語』(蒙古語族語言方言研究叢書 004) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Field, Kenneth L. 1997. "A Grammatical Overview of Santa Mongolian." Doctoral dissertation at University of California, Santa Barbara.

- Fried, Robert Wayne. 2010. "A Grammar of Bao'an Tu, a Mongolic Language of Northwest China." Ph.D dissertation of the University of Buffalo, State University of New York.
- Georg, Stefan. 2003a. "Ordos." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 193–209.
- . 2003b. "Mongghul." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 286–306.
- 服部四郎 1953 「批評と紹介：ポッペ教授著『ハルハ蒙古語文法』」『東洋学報』36(1): 108–124. (服部四郎 1987 『服部四郎論文集 2: アルタイ諸言語の研究 II』三省堂. pp. 400–418 に再録)
- 和即仁 1989 「云南蒙古族语言及其系属问题」『民族语文』59: 25–36.
- Hugjiltu, Wu. 2003. "Bonan." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 325–345.
- フレルバートル・栗林均(編) 1997 『モンゴル語入門・会話 (モンゴル語研修テキスト 1)』(1997 年度 AA 研言語研修テキスト) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Ikegami, Jiro. 1974. "Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprache." *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker, Protokollband der XII*, 271–272, Berlin: Akademie Verlag.
- Janhunen, Juha. 1990. *Material on Manchurian Khamnigan Mongol*. (Castrenianumin toimitteita 37.) Helsinki: The Finno-Ugrian Society.
- . 2003a. "Proto-Mongolic." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 1–29.
- . 2003b. "Written Mongol." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 30–56.
- . 2003c. "Khamnigan Mongol." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 83–101.
- . 2003d. "Mongol Dialects." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 177–192.
- . 2003e. "Para-Mongolic." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 391–402.
- . 2003f. "On the Taxonomy of Nominal Cases in Mongolic." *Altai Hakpo* 13: 83–90.
- , ed. 2003. *The Mongolic Languages*. London and New York: Routledge.
- Janhunen, Juha A. 2012. *Mongolian*. (London Oriental and African Language Library 19.) Amsterdam: John Benjamins.
- 「池田哲郎著『アルタイ語のはなし』におけるモンゴル系諸言語の記述に関する問題点」『大阪外国語大学論集』25: 73–100.
- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一(編) 1989–2002 『言語学大辞典』(第1巻～第6巻, 別巻) 三省堂.
- Kim, Stephen S. 2003. "Santa." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 346–363.
- Kullmann, Rita and D. Tserenpil. 1996. *Mongolian Grammar*. Hong Kong: Jensco, Ltd.
- 栗林均 1992 「モンゴル諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編) 『言語学大辞典』第4巻, 517–526, 三省堂.
- 2000 「草原の道 (〔特集〕ことばの道—言語伝播の道筋をたどる)」『言語』29(6): 50–58.
- Luvsanvandan, Sh., ed. 1966. *Orchin Cagijn Mongol Xel Zij*. Ulaanbaatar: Ulsyn Xevlelijn Xereg Erxlex Xoroo.
- 木仕华 2003 『卡卓语研究』北京: 民族出版社.
- Moseley, Christopher, ed. 2010. *Atlas of the World's Languages in Danger, 3rd edn*. Paris: UNESCO Publishing. Online version: <http://www.unesco.org/culture/en/ endangeredlanguages/atlas> (2022 年 2 月 14 日最終閲覧)
- Napolis, Mateus Froes. 2014. "Studies on the Verb Complex of Santa Mongolian." MA thesis at the Payap University, Thailand.
- Nugteren, Hans. 2003. "Shira Yughur." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 265–285.
- Poppe, Nicholas. 1930. *Dagurskoe narechie*. Leningrad: Izdatel'stvo Akademij Nauk SSSR.
- . 1951. *Khalkha-mongolische Grammatik*. Wiesbaden: F. Steiner.
- 大竹昌巳 2015a 「契丹小字文献における母音の長さの書き分け」『言語研究』148: 81–102.
- 2015b 「契丹語の奉仕表現」『KOTONOHA』149: 1–15.
- 2016 「契丹語形容詞の性・数標示体系について」『京都大学言語学研究』35: 59–89.
- 2020 「契丹語の歴史言語学的研究」京都大学博士論文.
- 清格尔泰 1991 『蒙古语语法』呼和浩特: 内蒙古人民出版社.



- Robbeets, Martine. 2016. "Insubordination and the Establishment of Genealogical Relationship across Eurasia." *Insubordination* (Nicholas Evans and Honoré Watanabe, eds.) (Typological Studies in Language 115), 209–246, Amsterdam: John Benjamins.
- Rybatzki, Volker. 2003a. "Middle Mongol." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 57–82.
- . 2003b. "Intra-Mongolic Taxonomy." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 364–390.
- 斎藤純男 2012 『モンゴル語史研究入門』 [草稿 2012 年版] 東京学芸大学.
- Schönig, Claus. 2003. "Turko-Mongolic Relations." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 403–420.
- 塩谷茂樹 2006 『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』 (大阪外国語大学学術研究叢書 35) 箕面：大阪外国語大学.
- Skribnik, Elena. 2003. "Buryat." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 102–128.
- Slater, Keith W. 2003a. "Mangghuer." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 307–324.
- . 2003b. *A Grammar of Mangghuer: A Mongolic Language of China's Qinghai-Gansu Sprachbund*. London and New York: Routledge Curzon.
- Svantesson, Jan-Olof. 2003. "Khalkha." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 154–176.
- Svantesson, Jan-Olof, Anna Tsendina, Anastasia Karlsson and Vivian Franzen. 2008. *The Phonology of Mongolian*. Oxford: Oxford University Press.
- 橘瑞超 1914 『蒙古語研究』 大阪：大阪實文館.
- 武内康則 2013 「契丹語の研究」 京都大学博士論文.
- . 2015. "Direction Terms in Khitan." *Acta Linguistica Petropolitana* 11(3): 453–464.
- . 2016 「契丹語の複数接尾辞について」 『言語研究』 149: 1–117.
- . 2017 「契丹語の数詞について」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 93: 91–104.
- Tsumagari, Toshiro. 2003. "Dagur." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 129–153.
- 植田尚樹 2013 「モンゴル語の母音調和と母音の弱化：外来語を用いた分析」 『京都大学言語学研究』 32: 37–76.
- . 2014 「UB モンゴル語の i と e の合流」 『京都大学言語学研究』 33: 89–104.
- . 2018 「モンゴル語の母音に関する総合的研究」 京都大学博士論文.
- . 2019 『モンゴル語の母音：実験音声学と借用語音韻論からのアプローチ』 京都：京都大学学術出版会.
- 梅谷博之 2008 「モンゴル語の使役接辞 -UUL と受身接辞 -GD の意味と構文」 東京大学博士論文.
- . 2013a. "Classification of Some Sentence-Final Modal Particles in Khalkha Mongolian." 『東京大学言語学論集』 33: 301–318.
- . 2013b 「モンゴル語の名詞・形容詞・副詞の区分」 『第 147 回日本言語学会大会予稿集』, 338–343.
- . 2014 「モンゴル語の否定小辞の自立度」 『第 148 回日本言語学会大会予稿集』, 284–289.
- . 2015 「モンゴル語における形容詞を修飾する不変化詞」 2014 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」 2015 年 3 月 26 日. 於京都大学ユーラシア文化研究センター.
- 山越康裕 2004 「モンゴル諸語の 'particle' について：シネヘン・ブリヤート語の事例から」 『環北太平洋の言語』 11: 151–178.
- . 2007a 「ハムニガン・モンゴル語」 中山俊秀・山越康裕 (編) 『文法を描く 2：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』, 229–258, 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- . 2007b 「シネヘン・ブリヤート語の clitic」 『アジア・アフリカの言語と言語学』 2: 1–15.
- . 2008 「品詞分類のありかた：シネヘン・ブリヤート語の事例から」 『アジア・アフリカの言語と言語学』 3: 47–59.
- . 2011. "Shinekhen Buryat." *Grammatical Sketches from the Field* (Yasuhiro Yamakoshi, ed.), 137–177, Fuchu: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- . 2012a 「シネヘン・ブリヤート語の形動詞」 『北方人文研究』 5: 95–111.
- . 2012b 『詳しくわかるモンゴル語文法』 白水社.

- 2017. ‘Mongol töröl xelnüüdijn “insubordination” (gishüun bus ögүүлber).’ *Mongol Sudlal ba Togtvortoj Xögzhil*, 289–292, Ulaanbaatar: International Association for Mongol Studies.
- 2018 「モンゴル諸語における分詞の統語機能と文末標識」2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」2018年3月29日. 於京都大学ユーラシア文化研究センター.
- Yu, Wonsoo. 2011. *A Study of the Mongol Khamnigan Spoken in Northeastern Mongolia*. (Altaic Languages Series 4.) Seoul: Seoul National University Press.
- 云南省通海县蒙古民族文化研究传承保护中心・内蒙古锡林郭勒职业学院蒙古文化研究所 2017 『云南省通海县兴蒙蒙古族乡喀卓语』昆明: 云南民族出版社.
- Weiers, Michael. 2003. “Moghol.” *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 248–264.